

張文環小說中的女性悲劇角色之設定 -藉由女性角色身邊的男性-

北見 吉弘 *

摘要

張文環小說以當時封建社會為背景，許多是以適婚年齡女性或已婚女性為主角的作品。在這些作品裏，往往多描寫與悲劇的女性之相關故事情節。另一方面，這些悲劇的女性裏不可或缺的人物設定，就是與這些女性人物戀愛或結婚的男性人物。實際上，這些男性人物在張文環的悲劇的女性的描寫上擔任極為重要的角色。

這次筆者著眼的就是這些男性人物形象，張文環設定他們為經營商店相關的人物。主要分析這些相關的男性人物與女性人物的關係，進而探討張文環小說中悲劇女性的基本要素。

關鍵詞：張文環、台灣文學、新女性、商人

* 育達科技大學應用日語系助理教授



Setting of Female Tragedy in Zhang Wen- huan's Novel — Through the Heroine's Partners of Romance and Marriage

Yoshihiro Kitami *

Abstract

Zhang Wen-huan's novels works mostly set the girls of age and married young womens to heroine. In the stories, there can see a lot of female tragedies written by him. Meanwhile, the essential element of the women's tragedy is the male characters, who setted as a heroine's romance or marriage partner. Actually These male characters play very important role in this heroine's tragedy.

This time, I focused on the the common point in which those male characters, that belong to their store management family. And did a study about them, and the relation between heroines, and fundamental factors of the women's tragedy in Zhang Wen-huans novels.

Keywords:Zhang Wen-huan, Taiwanese literature, New generation woman, Merchant

* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University



張文環小説における女性悲劇の設定 —女性人物の相手男性像をめぐり

北見 吉弘 *

要旨

張文環小説は、当時の封建社会における適齡期の娘、或いは既婚女性を主な登場人物とした作品が多く、関連作品では往々に女性悲劇に関わる物語が展開する。いっぽう、これら女性の悲劇に欠かせない要素が、女性人物の恋愛や結婚の相手として設定された男性人物である。これら相手男性は女性側の悲劇をめぐり、極めて重要な役割を担うものである。

今回はそれら女性人物の相手男性が、常に商店経営関係の設定であることに着目し、関連する男性人物、及びその女性人物との関係を分析し、張文環小説における女性悲劇の基本的要因を探った。

キーワード: 張文環、台湾文学、新女性、商人

* 育達科技大学応用日本語学科助理教授



1 序

張文環小説の特徴の一つは、縁談や結婚に直面した女性人物を中心とする描写が多いことである。関連作品には主に結婚適齢期の女性や結婚後の婦人が有する不安や失望感、孤独感などが描かれ、これら女性人物は被抑圧的な立場にあり、当時の不合理な社会制度の被害者として往々に女性悲劇の様相を呈している。かくして、張文環小説は多く女性悲劇を得意とする印象を強くする。いっぽう、これら女性悲劇に関し、その悲劇の要因となるのが商店経営関係の男性の存在である。これら男性は常に女性の運命を左右する役割を担う。即ち張文環小説における女性悲劇を理解する上で、基本的には先ずこれら商人経営関係の理解が不可欠要素である。以上が、今回の筆者による研究動機である。

本研究の研究成果として期待されるのが、張文環が女性悲劇を描いた根本的要因の提示である。即ち、一つ目が上述の如く張文環小説の女性悲劇に関わる男性人物像の分析である。そして二つ目がそれら男性人物が物語において女性悲劇と如何なる関わりを持つかにおける分析である。

なお、今回の研究題材が張文環小説における女性悲劇、そしてそれに関わる商店経営関係の男性人物像に関するもので、いずれも筆者による過去の研究成果が主な先行研究となる。¹

2 女性悲劇に関わる男性人物

2.1 概要

まず、張文環小説において女性悲劇を探る上で、それに直接的に関わり、その原因となる男性人物設定の経緯を論じたい。

一、張文環小説における主人公男性やヒロインをめぐる家族構成は親世代と子

¹ 張文環小説におけるヒロインの悲劇に関しては、「張文環の小説作品における女性の悲劇——縁談との関係をめぐり——」（北見吉弘『育達科大學報』第43期、2015）が挙げられ、ここでは張文環小説における女性悲劇の要因が縁談にあるものと仮定し論を進めた。そして商店経営家庭の男性人物像に関しては、「張文環小説における「父」像に関して」（北見吉弘『世新日本語文研究』第8期、2016.04）が主な先行研究となり、ここでは張文環小説における親世代人物である父親像を分析し、それが商店経営に関わる人物が常であること、人物造形に込められた作者の思想性を探った。



世代による親子二世帯が常であり、これは作者の人物設定における関心が常に台湾地方社会に生きる親子間の関係にあったことを意味する。

二、これら親子二世帯家庭が商店経営家庭の場合、主に商店経営主である父親像、その家の長男や一人息子による男性像に焦点があてられる。張文環小説では往々に封建制度や資本主義批判の手段として、常に商売人の人物設定が伴われることに関係する。

以上、詳細に関しては筆者の研究を参考にされたい。²

次に、張文環小説の女性悲劇に関し、要因となるのがヒロインの相手男性に設定された商店経営関係の男性の存在である。これら男性は常に女性の社会的生存に大きな影響力を有し、往々に女性の運命を左右する役割を担う。なお、張文環はこれら女性悲劇に際して、不合理な封建制度や資本主義など当時の社会的背景を意識しているが、張文環小説における社会批判は往々に商売人型の人物設定を伴う傾向が極めて高い。即ち、作者の女性悲劇をめぐる物語には、常にこれら男性像の設定が不可欠要素となっているのである。

2.2 知識人型と商売人型

張文環小説における商店経営をめぐる親子二世帯家庭は主には、知識人型と商売人型とに分類される。以下、その概要に関して論じたい。

知識人型の場合、作者の自伝的要素³を有する新世代（子世代）の人物が主となる。人物像の特徴となるのが中流階級に属する商店経営家庭の出身でありながら、人間教育に携わる知識人たる道を歩むのが特徴である。これらは張文環の実家が雑貨店経営や工場経営に関わっていたことが基本的な題材となっている。そして旧世代（親世代）側の場合は主に商店経営に携わる父親像の設定が中心となり、関連人物はいずれも当時の資本主義的な商売人の生き方を否定し、伝統的、人道主義的な知識人的な生き方を信念とする。即ち知識人型の場合、不合理な社

² 北見吉弘「張文環小説における家族構成 ―親世代と子世代を中心に―」を参考。（『育達科大學報』第40期、2015.04）。

³ 作者の自伝的要素を濃くする。中産階級、或いは小資産家の出身である張文環本人の家庭背景がそのまま題材となり、父親の生活費や学費の支援の下、日本の大学留学などの高学歴取得を願い、伝統的な知識人たる生き方を望むのが、それら主な人物像に共通した特色である。関連人物では張文環が小梅での公学校時代から日本の大学就学時期までの青年期を題材にした「山茶花」賢、「落蕾」明仲と続き、そして日本留学後の台湾生活を描いた「地方生活」澤、「土の匂ひ」輝清といったものが挙げられる。



会制度や歪んだ封建制度への批判意識を強く持つのを特色とする。

いっぽう商売人型の場合は、張文環の人物観察を通じた俗世間一般の商店経営家庭が主な対象となる。まず旧世代（親世代）側の人物造形は、資本主義的な価値観を持ち、拝金主義的な生き方を旨とする人物が多くを占める。そして、新世代（子世代）側の場合は商店跡継ぎという世襲制度の恩恵に預かり、勤勉性、道徳性を欠いた人物造形が際立つ。即ち、親世代、子世代とも、作者による当時の資本主義批判の手段として設定された人物である。また、これら商売人型が知識人型と相対立した関係にあることも理解できよう。

2.3 知識人型と商売人型との対立関係

張文環において主人公設定の最も多い男性人物が知識人型の子世代側である。商店経営家庭出身であるが、日本の大学留学などを通じ人文学専攻の知識人青年の設定が常である。そして、これら知識人型が学問や教育に価値観を示した要因となるのが、親世代側（父親の設定）による厳格な家庭教育、そして伝統的漢文教育や道徳教育である。これら親世代側は常に子世代側に教養豊かな伝統的知識人としての生き方を望み、常に人道的生き方を貫かせるべく指南役を務める。ただし、これら知識人型の家族構成は張文環の自伝的要素を基本とし、極めて限られた存在であることに留意されたい。

作者にとって、実際の社会全般における商店経営家庭は、自身の人間観察を通じ描かれた商売人型に属する。また、張文環小説ではこれら商売人型は常に資本主義の権化として批判の対象となる存在である。そして、この資本主義批判の根底となるものが、商売人型の学問、教育に対する歪んだ価値観に他ならない。以下は「山茶花」賢（知識人型の子世代）の「父」楊徳義（親世代）による「RK庄」における商売人型への見解と批判が記された箇所引用である。

RK庄の店はたいていそれで一代のうちに大きな財産を拵へてしまふから、自分は子供達に勉強させるよりも、いくら上の学校に行つた所で、これよりぼろい儲けがある筈がないと思つてゐるやうであつた。⁴

⁴ 張文環「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、2002.08.31、p.165。



楊德義は張文環が実父をモデルとした知識人型であり⁵、父親像としては特殊な人物造形に属し、かつ、知識人型の親世代側の典型たる人物であると言える。上の引用では学校教育や学問を通じた商売人型への批判が示されているのが分かる。基本的には知識人型と商売人型の対立関係は、両者の学問への見解の違いが中心となる。更に、知識人型の立場にある作者にとって商売人型の学問に対する思想性は、結果として人間性腐敗を招くものとみている。以下は上の引用の続きである。

しかしその子供の時代になると、庄よりも都会の方が美しく、そして女などはあかぬけて、一目みたゞけでも自分の脳裡には一大文化的な飛躍をかんじざるを得ないのである。(中略)金持とは云ふけれども、三代逆のぼれば百姓と云ふ言葉はこゝでは通じないのである。せいぜい一代や二代で店が衰へてしまふのが普通である。⁶

知識人型、商売人型の人物設定の背景には、以上のような血縁断絶に関わる大きな問題が意識されている。要するに商売人型の資本主義的、拝金主義的な価値観が子世代に悪影響を及ぼし、世代間の継承を経て、最終的には商店経営は衰退するというのが作者の見解である。また、知識人型の親世代が商店経営主でありながら、子世代(長男や一人息子の設定)に対し商売人たる生き方を望まなかったのも、主には商売人型にする当時の台湾社会一般の商店経営家庭が、往々に家計の破滅と衰退の道をたどったことを熟知していたからである。このように張文環小説で多く商店経営家庭を背景に親子二世代の設定が見られるのは、世代間を通じた適者生存の問題が絡んでいるからである。

いっぽう、張文環が多く女性悲劇に際し、常に商売人型を設定した理由は、被抑圧者たる処遇にあった女性人物の悲劇の描写に不可欠な人物であること、そして更には将来的に商売人型が直面する商店経営衰退という適者生存の問題も意識されていたことにある。

⁵ 知識人型の親世代(父親像としての設定)は、常に作者の実父(張察)の存在が題材となっている。「張文環親戚・旧友訪探録」(柳書事訪問・記録)、第一章「張毓漢氏へのインタビュー」(張毓漢:張文環の従兄弟)によれば、張文環の父である張察は、中国思想から古典文学までの漢文に精通した知識人としての一面が強く、子供に立派な教育を施したい一心で、息子二人(張文環の弟を含む)を日本留学に出したとされる。また、小梅(小梅坑、現在の梅山)ではこの話題がもちきりだったという。

⁶ 同注4、p. 165。



現在のところ女性悲劇を通じて示された作者の思想性は、主に封建伝統に対する社会批判であるというのが通説だが、上述の如く、作者の社会批判の根底には、作者が資本主義の権化とみなす商売人型への批判があったことが拒めない。

3 知識人型をめぐる新女性の悲劇

3.1 知識人型における代表人物

知識人型の子世代に属する人物は主人公の設定が常であり、関連作品は処女作「落蕾」に始まり、「父の要求」、「頓悟」と続き、「土の匂ひ」までが含まれる。内容的には中流階級に属する商店経営家庭出身の青年（知識人型）が高学歴取得を通じ知識人たる生き方に志す様子が描かれる点で一致する。なお、関連作品の多くには新女性ヒロイン設定が施され、とりわけ初期作品では知識人型（子世代）とヒロインとの恋愛関係をめぐる葛藤が描かれ、物語のクライマックスにはヒロインの悲劇的な様子が設定されている。本項では知識人型と新女性ヒロインとの関係を分析し、作品に示された女性悲劇の様相を見ていきたい。

以下では、新女性ヒロイン設定がある作品に着目し、知識人型に属する「落蕾」明仲、「山茶花」賢、「地方生活」澤、「土の匂ひ」清輝を例に、物語に描かれた新女性ヒロインとの交際、そして、ヒロインをめぐる女性悲劇のありかたを探った。主な人物像は以下の通り（作品発表年代順）である。

知識人型	新女性ヒロイン
①「落蕾」明仲（商店経営者子息）	秀英
②「山茶花」賢（商店経営者長男）	娟
③「地方生活」澤（商店経営者長男）	淑
④「土の匂ひ」清輝（精米工場経営者長男）	阿鶯

なお、④のみは精米工場となっているが、他の知識人型と同じくほぼ類似した造形となっていることでリストに挙げた。



3.2 主要人物と新女性をめぐる

3.2.1 「落蕾」明仲、「山茶花」賢に関わる新女性の悲劇

「落蕾」明仲は商人家庭出身であるが、物語では日本での大学留学中の設定である。だが、この「落蕾」は台湾地方社会を舞台に、知識人型と新女性の恋愛と確執を描くことが旨であったことで、主人公は明仲の分身である義山（もう一人の知識人型）が担う。いわば明仲、義山ともに作者本人の分身でもあり、両者の思想性や学問に対する見解は一致する。ここでは、義山を中心に話を進めたい。義山は公学校時代から学級委員を担うほどの学問好きの青年であり、公学校同期の明仲の助言を受け、日本留学の準備にかかる。いっぽう、義山には公学校時代から交際を続ける新女性の秀英があり、日本への同行を求める。だが秀英は既に適齢期にあり、将来性の見えない義山よりも、大雑貨店の息子との縁談を受け入れる。義山が感じたのは「矢張り理智を愛するとともに裕福な生活に対する好奇心を棄て得ないのだ」⁷という、当時の現代女性の持つ結婚に対する歪んだ姿勢であった。かくして義山は秀英との関係を解消し日本へ出発する。「落蕾」の終わり近くでは、義山との交際による妊娠が発覚し密かに墮胎するクライマックスが設けられ、事実が露呈したことで、縁談が破談となり、墮胎による殺人罪に問われる危機に陥る。以下、続いて「山茶花」賢とそのヒロインに関して論じたい。

「山茶花」賢は商店経営家庭の一人息子であり、公学校、中学卒業を経て、日本での大学留学を始める。いっぽう、賢は幼馴染であり公学校でもクラスを共にした娟と交際中にある。だが、娟が賢を相手に選んだ要因が、賢が「村のはじめての大学生である」⁸という身分的条件、そして将来的に裕福な生活を目論んでいたことで、それを知った賢は娟との関係維持の限界を感じる。ちょうどその頃、娟に大雑貨店の息子との縁談が舞い込み、既に家長によって話がまとめられ、娟は絶望に陥る。以上、両作品とも物語の最後では、ヒロインの自殺を匂わ

⁷ 張文環「落蕾」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四巻〔張文環〕』、東京：緑蔭書房、1999.07.20、p.33。

⁸ 同注4、p.295。



せたものとなっている。⁹

これら作品の示す女性悲劇は間接的には商売人型に属する大雑貨店との縁談が関わる。そのため、それら商売人型のこれらヒロインをめぐる女性悲劇との関連性は認められる。だが、張文環小説全体から見た場合、これら新女性の悲劇の本質は特殊なものとして区別される。

まず、第一に新女性ヒロインの恋愛を扱った作品は、常に相手男性として知識人型の設定を伴うということである。知識人型が新女性ヒロインを相手に選んだのは、当時盛んであった女性運動のスローガンである女性解放、人権主張が唱えられていたことが念頭にあったと思われる。「落蕾」秀英の場合は公学校時代「文學少女」¹⁰として知られ、「山茶花」娟は公学校ではクラスでの成績が一、二を争うほど優秀で、「級長」¹¹を期待されたほどである。即ち、知識人型がヒロインに魅かれたのは己と志を同じくする同胞かつ伴侶として期待が持てたからである。だが、実際、知識人型が痛感した現代女性の姿は既に個人主義的、反伝統的である世俗的な女性そのものであった。作者がこれら新女性の設定において意図したのは、あくまでも当時の台湾社会における現代女性の性格描写であり、ヒロインをめぐる女性悲劇の提示は主要な要素でなかったと思われる（詳細は後述）。

そして第二が、それら作品が主に新女性の人間性批判を旨としており、いずれも知識人型による人間観察が施されている点である。これら新女性ヒロインは、利己的、打算的な性格を露呈しており、知識人型からすれば、封建社会における人間性墮落を促す意味で商売人型と同類の存在であったと考えられる。張文環は基本的には女性悲劇をめぐるその悲劇の所在を商売人型の人徳や人間性のありかたに定めるのが常であるが、それが「落蕾」、「山茶花」においては女性悲劇の

⁹ 以下は関連個所の引用である。「秀英は只一つの肉塊のやうにうなだれてゐた。あまり意外なことに表嫂も墓石のやうに突立つて、茫然と哀れな秀英と母を見比べて、（中略）此方でも騒ぎ立て、警察迄に知られたら、秀英が殺人罪にとはれるつて、そうしたら監獄へ赤い着物だと……。 （中略）母は全く親娘心中でもしたかつた。しかし、秀英は、秀英は勿論深淵に落とされたやうだつた。再び死の誘惑が彼女を襲うた。」（同注7、p. 29～30）「……娟は最後の一句を読むと、手紙を姉に放り出し口惜しさにあへいでるやうであつた。『東京に行つてゐるから自分を忘れる理性があるとは』と娟は賢に裏切られた口惜しきで、ほんといつてやらうか、死んでやらうかとちつと地面に叩きつけられたやうに、ぐつたり床に伏せたまゝであつた。」（同注4、p. 339）

¹⁰ 同注7、p. 22

¹¹ 同注4、p. 13.



所在がヒロイン本人の人間性の問題に置かれているのである。

3.2.2 「地方生活」澤、「土の匂ひ」清輝に関わる新女性の悲劇

「地方生活」澤は、商店経営者を父親に持つ長男であり、日本の大学就学時代は人文学を専攻する。ちなみに知識人型が往々に立身出世や金儲けとは無縁な人文学専攻となっているのは、主にその人間教育、道徳教育を重視する父親像の影響によるところが強い。澤は卒業後に台湾に戻るが、都会での就職活動に失敗後、生まれ故郷での再出発を決意する。帰郷後、澤は許嫁の婉仔と結婚し、落ち着いた日常生活を通じ、人情味豊かな「地方生活」の良さを再認識する。いっぽう、澤には従妹（婉仔の妹）の淑があった。淑は女学校に進学したインテリ女性であり、伝統的教育を施された姉の婉仔とは正反対の女性である。物語は澤をめぐるこれら新・旧二人のヒロインとの関係を基調に進展する。

澤の結婚相手が旧女性の設定となっはいるが、実質的には澤の相手女性には、「落蕾」、「山茶花」同様、新女性の存在が関わっている。澤のかつての日本留学時期における恋愛相手は「某美術研究所の女留學生」であり、澤は医学や法律学専攻の専攻でなく文学専攻であることを理由に拒絶され、結果、「現代女性の虚榮の縮圖」を知らしめられる。¹²この「女留學生」が、淑を想定して設定されたことは、淑が望む相手が医者や弁護士など「生活の確証されてる職業を持つてゐる」¹³条件の男性であることから明らかである。以下は淑に対する批判が示された箇所引用である。

かう云ふ現代的な女は案外精神力の乏しいことが澤は知つてゐた。健康な體に似はず、享樂を貪ぶりたい性格を澤は恐れてゐた。¹⁴

これは知識人型の観察を通じて示された淑の性格描写である。淑の場合、女学校進学を有利な縁談獲得の手段としていることで、秀英や娟に比べ、その計算高さや利己的な側面が強まり、知識人型による批判はより辛辣なものとなってい

¹² 以下は作品からの関連箇所の引用である。「澤はそのとき、某美術研究所の女留學生に心を奪はれてゐたので、故郷のことを顧みる心の餘裕がなかつた。しかし、所詮それが現代女性の虚榮の縮圖であり、一とたび背負ひ投げを喰はされると、澤の心は嵐の後のやうにすさんでゐても周囲の静けさに蘇生へつてくるのである。文學と美術はよき友と甘えてゐたが豈計らんや、それは現實の生活に何んの經濟的な根據を持たないのを知ると冷然として自分の姿に立ちかへつた。學校を出ても、それは一失業者の端くれであり、自惚れてゐたことが少しづつ削られていつた。」（同注13、p. 282）

¹³ 張文環「地方生活」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』、p. 307。

¹⁴ 同注13、p. 291。



る。また、作者はこの種の新女性の性格面の特徴をより効果的に示すべく、「落蕾」、「山茶花」と同じく女性批判に通じるクライマックスを設けた。主な概略はこうである。人格者として親しまれる淑の父親が病に倒れ、余命いくばくもないことを知り家族や親戚が一堂に集まる。だが結婚を目前とした淑は、病床の父親をよそに嫁入りの際の持参金を目的に家族に対し遺産相続の権利を主張する。かくして、淑は家族親戚から親不孝で不道德な娘として痛烈な非難を浴び、絶縁を言い渡され帰る実家を失うのである。

以上、知識人型を通じたヒロイン淑に関する人間性批判の設定は物語のクライマックスに描かれ、前述した「落蕾」、「山茶花」と共通する。だがこの「地方生活」には肝心の女性悲劇に関する要素は見られない。というのも、淑は秀英や娟の如く破滅型に属する人物としては描かれておらず、最終的には理想の縁談を獲得し「現代女性の虚榮」を満足させた意味で生存型に属する人物だからである。また、秀英、娟を含め、恐らく作者は基本的にこれら新女性ヒロインを悲劇的人物とは認めていなかったと思われる。作者の新女性ヒロイン設定の目的は、あくまで人間性描写が主体であり、「落蕾」から「地方生活」の各ヒロインをめぐる設定された物語のクライマックスは、作者による現代女性への人物批判の意思表示に過ぎないものである。

このように新女性ヒロインが張文環小説の女性悲劇に関与しない存在であることは、続く「土の匂ひ」にも示されている。主人公清輝（知識人型）¹⁵に設けられた女性ヒロイン阿鶯は「地方生活」淑の延長上のインテリ女性¹⁶である。「金儲けの上手な、隅に置けない女」¹⁷である阿鶯は、夫の死後、夫の遺族相手に遺産相続で得た資金を元手に、農産株式会社の経営者に成り上がった人物として描かれていることで、淑と同じく生存型に属する。

3.3 まとめ

知識人型と商売人型との大きな違いは、学校教育や学問に対する見解において

¹⁵ 「地方生活」澤と同じく、日本の大学留学中に文学を専攻し、帰国後、都会での就職に失敗した人物である。清輝は定職のないまま文芸雑誌用の記事を執筆し生計を立てる。ある日、姉の紹介で年若い未亡人阿鶯と知り合う。だが、清輝は阿鶯に異性としての魅力を感じず、旧女性の玉鑾に恋心を懐く。

¹⁶ 女学校卒業のインテリ女性。清輝の「姉」節の女学校時代の「同窓」でもある、また「裕福な家」に嫁いだことで淑の分身と判断される。（同注17、p. 31、p. 32を参考）。

¹⁷ 張文環「土の匂ひ」、『臺灣文藝』七月號（一卷第三號）、1944.07、p. 32。



である。知識人型がとりわけ学問や教育に厳格な態度で臨んでいるのに対し、商売人型の学問や教育に関する見解は基本的には個人の欲求を満たすべく手段となるものである。それは作品「頓悟」に登場する呉服店店主の李旺福（商売人型）の学問に対する見解が「學問と云ふのはやはり社會の地位を得るための學問でせう。（中略）それならば、為徳君、金を儲けることではないか、（中略）これが商業精神です」¹⁸ とあることから理解できる。即ち、作者が主に新女性ヒロインを設定した思想的根底には、直接的には新女性ヒロインに対して、そして間接的には商売人型に対しての批判意識があったからである。本項では、女学校卒業という高学歴を手段に理想的な縁談を獲得した「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯が筆頭となり、続いて公学校で新教育を受けながらも裕福な生活を求めた「落蕾」秀英、「山茶花」娟がそれに続く。

以上、新女性と女性悲劇との関連を探ってきたが、まず結論から言うと、読者の立場としては「落蕾」、「山茶花」に限り女性悲劇に属するものと判断はできる。ただし、作者の立場からは「落蕾」から「土の匂ひ」に至り、特に女性悲劇を描こうとする考えはなかったと考えられる。その理由は以下のとおりである。

一、女性悲劇の題材として描かれる女性像は常に封建制度の被害者、犠牲者たる共通性を有するものであるが、新女性ヒロインにはそういった要素は希薄である。新女性ヒロインをめぐる知識人型の設定は、あくまで新女性像の人間性を知る上での観察者たる役割を担い、そこに示されたのは新女性の有する個人主義的、打算的、反社会的な性格である。即ち、作者が非難する商売人型と同様、それら新女性ヒロインは、価値観や生き方をめぐり、知識人型と相対立する存在なのである。

二、作者による新女性ヒロインの設定は、現代女性の実際の姿と性格を示すことを目的とするもので、女性悲劇は意識されていない。張文環小説の女性悲劇の構成は、新女性ヒロインのように物語のクライマックスとして設定されたものではなく、基本的にはヒロインの悲劇的運命を示すべく、過酷で苦難な日常生活の描写を通じて示されるものである。

¹⁸ 張文環「頓悟」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』、p. 221。



4 商売人型をめぐる旧女性の悲劇

4.1 主な人物設定

女性悲劇をめぐる商売人型では、知識人型と同じく子世代側の設定が主となり、公学校教育を義務付けられた年代の人物が多くを占める。知識人型が往々に主人公の設定であるが、商売人型は適齢期の女性をめぐる周辺人物の設定が常である。これらは作者により知識人型と相対する設定となり、その性格描写にしても自活能力や社会適応力に乏しい側面のみが描かれ、関連人物は一律同類という印象が強い。だが注目されるのは張文環小説における女性人物の相手男性は、常にこの種の商売人型の子世代が設定されていることである。すなわち張文環小説において悲劇的女性が多く登場するのも、主には商売人型の設定が関連しており、それら商売人型は女性悲劇を描く上での主要素材として用いられるのが常である。

まず、張文環小説全体で女性との縁談や結婚の相手として登場する人物に限定すると以下の通りとなる（作品発表順）。

人物像	相手女性
①「落蕾」 “K”（大雑貨店跡取り）	秀英
②「みさを」 “夫”（不詳）	翠鳳
③「二人の花嫁」阿福（金銀紙店経営者）	阿嬌
④「部落の惨劇」萬壽（不詳）	淑花
⑤「闖雞」阿勇（漢方薬方店次男）	月里
⑥「地方生活」澤（商店経営者長男）	婉仔
⑦「地方生活」 “醫者の玉子”（医学専門学校生）	淑
⑧「媳婦」阿全（雑貨店跡取り）	阿蘭
⑨「山茶花」 — ¹⁹ （大雑貨店跡取り）	娟
⑩「山茶花」 “男” ²⁰ （商人）	錦雲

¹⁹ 物語では名称や呼称はなく、縁談先として「0庄の一ばん大きな雑貨店」（注4、p.335）の一言が記されたのみである。

²⁰ 注21を参考にされたい。



- | | |
|------------------------|----|
| ⑪「山茶花」 “青年”（公学校教員） | 嬋 |
| ⑫「地に這うもの」陳久旺（老舗雜貨店跡取り） | 阿錦 |
| ⑬「地に這うもの」王明通（雜穀店跡取り） | 阿媛 |
| ⑭「地に這うもの」王仁徳（豆腐屋跡取り） | 秀英 |
| ⑮「地に這うもの」貴樹（雜貨店次男） | 阿蘭 |

以上のリストは、張文環小説全体において女性の縁談や結婚相手として登場した男性像を全て列挙したものである。主な目的は張文環小説におけるヒロインをめぐる相手男性の設定が、商店経営家庭を中心としたものであることを理解していただくことにある。リストには商売人型に属さない人物も含まれるが、全体的には商店経営者の跡取り息子が多く占めているのが分かる。即ち、このリストは張文環小説における女性の縁談・結婚が往々に商店経営者の跡取り息子と密接な関係にあることを示している。ちなみに商売人型に属さない人物では、職種が異なる⑦「地方生活」の医学専門学校生、⑪「山茶花」の公学校教員、そして商店経営家庭の出身ながら、商売人型には属さない⑥「地方生活」澤、⑮「地に這うもの」貴樹などとなる。

本項では、リストにある商売人型の子世代側に属す跡取り息子を対象に論を進めさせていただく。まず、商売人型の跡取り息子は、商店経営という生産手段の私的所有、そして世襲制による財産継承といった恩恵に甘んじ、勤労精神や道徳性の欠如を甚だしくする人物である。先に論じた如く、学校教育や学問に対する歪んだ価値観を持ち、往々に知識人型と対立的な存在となる。そのため勤勉性を欠いた側面が強調され、放蕩息子、親不孝者、不道德者の人物造形が多くを占める。いっぽう、その相手女性は封建的な婚姻により商店経営家庭に嫁がされた旧女性が主となる。

以下、これら商売人型とその旧女性をめぐる女性悲劇の様相を探りたい。

4.2 主要人物と旧女性をめぐり

張文環が好んで描く人物造形は主に苦難に直面し奮闘する被抑圧者たる人物である。また女性悲劇が多く描かれたのも、当時の台湾社会における被抑圧者たる苦境にあった旧女性が作者の関心を促したからである。封建社会では、男性は



常に家父長制と世襲制度の恩恵を受ける身であるが、逆に女性の場合、いったん適齢期になると縁談を通じた嫁入りが義務付けられ、婚家における自己の生存維持、死活問題などの現実と直面せねばならなかった。かくして張文環小説では旧女性ヒロイン中心の人物設定傾向が強まり、同時にそれをとりまく商売人型の設定が顕著となった次第である。

なお、張文環のヒロインは主に新女性と旧女性に分類されるが、悲劇的女性としての設定は旧女性を中心となる。旧女性は封建式婚姻に対して、新女性の如く非道徳的な手段で対処することはなく、常に家長の決めた縁組に無抵抗に従うことを運命とする。即ち、旧女性は善良な庶民という印象が強い。

そして旧女性の相手が商売人型という人物設定は、「山茶花」錦雲の適齢期における縁談話の様相から判断できる。錦雲は台湾地方社会の一般家庭に育った旧女性ヒロインの一人である。だが実際に込まれた縁談は商売人型が主である。以下は「山茶花」からの引用である。

ぽつぽつ縁談がもちこまれて姉は泣いた。(中略) 渡鳥の様な反物の行商人、製糖会社の女工監督、雑貨店の与太者見たいな若主人、甚だしいのは第二号の話で父を怒らしたことさへある。(中略) 姉は商人よりも学校の先生のサーベルや金モールの肩章に憧れてゐるやうであつた。²¹

旧女性は儒教伝統に忠実なため、結局、この錦雲も商人との結婚を受け入れる運命にあった。²² 錦雲の失望は論ずるに及ばず、肝心なのは、張文環小説の人物設定の傾向を見た限り、封建社会における一般家庭出身の旧女性は往々に商売人型に嫁がされる設定になる傾向が強いということである。

ただし、これら商売人型は女性ヒロインをめぐる周辺人物として設定された場合、例えば「落蕾」の大雑貨店息子“K”、「山茶花」の錦雲の結婚相手、娟の縁談相手などの如く、登場場面が僅かであったり、単にその存在のみが示され登場場面が皆無である人物も少なくない。よって、以下では具体的な生活描写が施された商売人型の子世代(跡取り息子の設定)に焦点を絞り、それら人物像及び

²¹ 同注4、p. 66。

²² 錦雲が商売人型との結婚を受け入れた事実は、後に妹の娟との会話において示されている。(同注4、p. 333～p. 334)



女性悲劇の様子を分析してみたいと思う。

4.2.1 「地に這うもの」王明通に関わる旧女性の悲劇

「地に這うもの」王明通は大雑穀店の跡取り息子である。しかし、店の跡継ぎたる勤勉性の欠如が甚だしく、結果、家業を衰退に追いやる。以下は関連個所の引用である。

ひとり息子のゆえに、両親も健康であればいいとばかり祈って、息子が拳闘に夢中になってるのをとめなかった。(中略)そこへ両親が亡くなると王明通はすっかり親分気取りで、先代が残してくれた一身代をたちまちつかいはたしてしまった。(中略)そういう男の生活基礎はどうしてもお留守になるものである。²³

商売人型の家庭の場合、家長が子供の教育を厳かにした結果、息子の代で家業が傾くというパターンは、張文環作品に多く見られるものである。即ち、当作品における張文環の人物批判の対象は基本的には商店経営主である家長(親世代)が含まれ、張文環小説における放蕩息子の設定は常に家長の子供への教育問題を前提とする。また、張文環は、商売人型の商店経営体系は親世代から子世代に受け継がれる過程で衰退するという見解を示しており、当作品でもそれら放蕩息子により衰退した商店経営の様子、そして最後に雑貨店経営の破綻と終焉の様子が描かれている。²⁴

続いて、当作品で描かれた女性悲劇に関して論じたい。ヒロイン阿媛は「良家の娘」の出であり、王家に嫁いだ理由が「梅仔抗庄内でも一、二をあらそう雑穀店」²⁵とある如く、王家が分相応の条件を備えていたからである。だが、王家の商店経営は傾き、阿媛は「こんな男のところへ嫁にくるとは思わなかった」²⁶と後悔して止まない。また、商店経営に不向きな王明通は頼りにならず、結果、阿媛は「良家の娘」に不相応な労働と生活苦を味わいながら、雑穀店、豆腐店、雑貨店と商売替えを繰り返す。

²³ 張文環『地に這うもの』、東京：現代文化社、1975.09.15、p.134。

²⁴ 以下は関連個所の引用である。「王明通の生活はたちまち行きづまって、夫婦二人は終日ぼつねんと、左前になりかかった店先に座って、待ち呆けてるやうな顔をしていた。店先を歩いて行くお客はふり向こうとさえしない。」同註23、p.135。

²⁵ 同註23、p.134。

²⁶ 同註23、p.140。



以上、張文環作品における商売人型がもたらす女性悲劇の様相から理解できるのは、商売人型の不道德、旧女性の不幸は表裏一体の関係にあり、張文環は往々にこの種の男女人物設定を通じて、女性を男性の奴隷と認める不合理な封建制度への社会批判を繰り返しているのが分かる。

4.2.2 「部落の惨劇」萬壽、「媳婦」阿全等に関わる旧女性の悲劇

商売人型の子世代（主に商店後継者として設定）には、基本的に当時の小学校教育に当たる公学校教育の普及が反映されている。この公学校の教育に関し、「公学校令」の規定では、国民教育の目的が道德教育の促進、実用的な学問習得、国民の性格養成、国語（日本語）習得にあったと記される。

だが、張文環作品における商売人型の子世代人物は、公学校教育の目的とは相反する非道德的、非人道的な側面が際立ち放蕩型となるか、或いは社会適応力を欠いた無能者型の人物となる。この人物設定の傾向は、処女作「落蕾」に秀英の縁談相手の「勉強のきらいなK」²⁷に始まるのであるが、その後の作品でも商売人型の人格上の問題の要因が常に学問や教育問題にからんでいることが注目される。以下、代表人物像の紹介を通じその様相と、女性悲劇の所在を論じたい。

ここでは「部落の惨劇」萬壽と「媳婦」阿全の二人の商売人型の解説に入りたい。この両者は公学校卒業の青年で、家の跡取り息子の設定であり、将来は家業の継承を期待された状況にある。「部落の惨劇」萬壽に関しては、家長の運営する家業の明記がないが、その後続作品である「媳婦」阿全の人物設定と極めて酷似するため、人物造形的に商売人型に属するものと判断した。

まず、「部落の惨劇」萬壽は公学校卒業であるが、親の教育上の怠惰が災いし、「我儘な息子」²⁸として成長する。二十歳近くになると、「部落の黴臭い空気を嫌（い）」²⁹家の金を持ち出して都会へ奔走する。萬壽の都会遁走の目的であるが、作品「媳婦」の内容から判断し、都会での女遊びを目的としたことは明らかである。いっぽう「媳婦」阿全は雑貨店の一人息子の設定である。だが「両親は一人息子を甘やかしてゐる」³⁰とある如く、やはり家長の教育怠惰が祟り、公学校卒業後、阿全は安易に「時々料理屋に這入り、臺北からきたその女にい

27 同注7、p. 17。

28 張文環「部落の惨劇」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』、p. 152。

29 同注28、p. 149。

30 張文環「媳婦」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』、p. 323。



ちやついてゐる」³¹放蕩息子となり、家の金を持ち出し都会へと遁走する。以下は関連箇所引用である。

春先になると山の産物がふえて、村の市場で出入するものがふえてくるのである。そのときに阿全が家出をしてしまった。(中略)臺北と云へば、公學校時分の修學旅行に一度行つた切りなので阿全は大膽であつた。これも戀の迷ひがさうさせたのだと阿蘭は悲しくて、齒を喰ひしぼつた。³²

阿全の「家出」の理由は「戀の迷ひがさうさせた」とあるように、都会で水商売女性と遊びたいという低俗な目的があつた。二作品とも、最後は家長から勘当された放蕩息子が頭を下げて実家に戻るようすを暗示させて物語は終わる。³³

続いて、ヒロインをめぐる女性悲劇に関して論じたい。「部落の惨劇」淑花、「媳婦」阿蘭ともに、商売人型の嫁となるべく養女となつた媳婦仔である。ちなみに、以上の各作品でヒロインが媳婦仔の設定であるのは、それら商売人型の家庭が小規模な商店経営であり、経済的にさほど裕福でないことに起因する。³⁴ 物語では、両者ヒロインともに許嫁の家出を心配しつつ、養父母に尽くし勤労に励む日常が描かれている。女性悲劇に関連する描写は限られ、強いて言えば、ヒロインが媳婦仔たる身の上で招いた許嫁の家出が挙げられる。以下は「部落の惨劇」からの引用である。

萬壽は遂黙つてしまふ。(中略)誰も嫁をもらつてくれとは云はぬし、また嫁と云つても今まで自分の妹のやうに育てられてきた鼻つたれ時代からの娘ではないか。その娘と結婚しろと云ふのだから一層自分が町に出たく

³¹ 同注30、p. 322。

³² 同注30、p. 323。

³³ 二作品とも、奔走した一人息子(商売人型の子世代、旧女性ヒロインの許婚)の都会生活が行き詰まることが暗示されている。「部落の惨劇」では息子に呆れた父親が「さはがない方がいゝ、放つておいた方がいゝ。その金を使ひ果したらかへつてくるよ。またわしは何も文句は言はない一遍外に出てきて見ないとお金の有難さはわからないものだ」と肅然と構えている様子から伺え、「媳婦」においても、「氣の小さい阿全のことであるから、果していやしい女の魅力がどの程度まで阿全を引き止めることが出来るかどうか、むしろ阿蘭は好奇心さへ感じるのだつた」と臺北で女遊びに呆ける阿全に対し阿蘭が悠然たる態度を示していることから、いずれは阿全が都会での生活に行き詰ることが予想される。(引用元:「部落の惨劇」p. 151、「媳婦」p. 329、)

³⁴ 以下は作品「地に這うもの」からの引用である。「台湾の田舎の中産階級以下の家はよく養女をもらつて、大きくなつたら息子の嫁にあてがう習慣がある。貧乏な家庭は氣心のあう嫁をもらうのは、この方法が一番つごうがいい。(中略)むしろこれは一人息子の場合が多い。」(同注23、p. 133)



なるのだ。味もそつけないやうな娘を誰が一生伴れ添ふべき妻としてもらふものか。³⁵

萬壽と阿全ともに男性側の立場からすれば媳婦仔たる娘は、相手女性としては毛嫌いの対象にしか過ぎない。都会での女遊びに走ったのも、媳婦仔と縁談を強制した家長への反感の象徴でもある。かくしてヒロインは、日常では家業、家事において義理の両親に尽くすのであるが、その脳裏には許嫁に拒絶されたことで、自身の置かれた媳婦仔たる心の不安を隠せずにはいられなかった。

なお、これら作品は媳婦仔ヒロインの結婚前の様子を描いたのみで完結していることで、具体的に女性悲劇を描くには至っていない。だが、これらヒロインをめぐる女性悲劇は潜在的に存在するかたちとなる。基本的には旧女性をめぐる女性悲劇の要素は相手男性の愛情欠如によるところが大きい。それは商売人型の縁組が、家長が決められ、本人の恋愛感情は重視されなかったことによる。張文環小説において、好色な不道德者として描かれる商売人型が多いのも、主には封建伝統による利害結婚が原因だからである。ただし、媳婦仔の場合は一般家庭の旧女性に比べ更に過酷な現状にある。「部落の惨劇」からの引用を見てみたい。

たゞ媳婦仔と云ふのは、小さいときから兄妹の如く育てられてきたゆめに、その子供時代の不恰好な印象が脳裡にしみついてゐて、他人が見るほど淑花には魅力を感じないのである。³⁶

義理の両親の家庭では女中たる生活を強いられ、かつ将来夫になるべく男性からの愛情は期待できない。要するに、媳婦仔ヒロインの待つ結婚生活は他の旧女性ヒロインに比べ、より凄惨となることが予想される。

こういった媳婦仔ヒロインをめぐる女性悲劇がより具体的に示された作品が「地を這うもの」であり、商売人型として登場するのが王仁徳である。王仁徳は豆腐商店の一人息子で、将来は店の跡取りとして期待された。そしてヒロイン秀英はその嫁となるべく媳婦仔である。だが王仁徳は公学校卒業後、自動車会社で働き、社長婦人の従妹と縁を結ぶ。かくして、許嫁という存在性を失った秀英は義理の親からの寵愛までも失う。やがて、更なる悲劇が秀英にもたらされる。あ

³⁵ 同註28、p. 150。

³⁶ 同註28、p. 322。



る晩、一人留守番中の秀英を、里帰り中の王仁徳が強姦する。だが、阿德は平然な態度で財産家の娘との縁組を取り纏める。秀英のほうは身ごもり出産する。本来は嫁たる身分が期待された秀英であるが、出産後は義理の両親から重荷として疎んじられ、女中としての生活を余儀なくされる。

以上、商売人型に属する跡取り息子は、いずれも公学校卒業生であり、知識人型の子世代と同世代の人物であることが注目される。だが、これら放蕩息子を生じた要因は、公学校教育との関係はなく、あくまで子供への家庭教育と躰を怠った家長にあるのが分かる。作者が商売人型の跡継ぎが「公学校」就学者であることを提示したのは、近代化が進む現代台湾社会においても依然と実在する商売人型の実態を読者に示さんとしたからに過ぎない。基本的には商売人型の親世代に対する作者の見解は変わらない。商売人型の親世代は商店という生産手段の私的所有があり、跡取り息子は店を継げばそれで良しとする安易な考えを有すること、そして結果として、不遜な跡取り息子により商店経営が衰退するということである。即ち、ここで論じた商売人型は前述した「地に這うもの」王明通とまったく同類の人物なのである。

このような商売人型との結婚が運命づけられたヒロインの不幸や悲劇の行方は論じるまでもなからう。

4.2.3 「閹雞」阿勇、「地に這うもの」陳久旺に関わる旧女性の悲劇

縁談相手の中流階級以上の裕福な商店経営者の跡取りのケースはかなり設定が異なる。例えば、「落蕾」秀英の縁談相手である「身分も違ふ程の金持ち」³⁷、「山茶花」娟の相手男性が「過分な配偶者」³⁸とある如く、張文環小説において家庭的条件の良い商人家庭は往々に商売人型に属する設定となる。

「閹雞」阿勇は金持ちの漢方薬店老舗に生まれた次男（長男は病死なので実質的な跡取り）で、家長三桂の要求に従い公学校卒業後、師範学校入学を命じられる。だがこの三桂が息子に高等教育を施そうと目論んだのは、あくまで息子の名声と地位を利用した商店経営の発展を願うもので、人間性育成の教育という考えは皆無である。以下は関連個所の引用である。

³⁷ 同注7、p. 20。

³⁸ 同注4、p. 333。



阿勇を中学に入れるよりも、師範学校に入れたほうが早い。その方が早い。師範学校を出て、村の公学校へかへつてきて、祭日の時などは、金筋の帽子と金モールの肩章、それからサーベルまでさげて、公学校に行き、恩給をもらふやうになれば薬屋を譲る。これより合理的な計画はない。³⁹

だが、結果阿勇は師範学校試験に入れず、公学校高等科に入学する。いずれにせよ、家長から阿勇に託された学校教育の主旨は商店経営のための利害獲得にあった。家父の命による高等教育は当事者の自主性や適性を蔑ろにしたものであり、無目的にそれに従った阿勇は結局は「世間知らず」⁴⁰の無能な人材となり、家長の死により行き場を失う。

いっぽう、ヒロイン月里の悲劇は、家長清漂による利害結婚（清漂縁が目論むのは相手の持つ薬屋買収である）を発端とする。そして、その更なる悲劇は夫である阿勇が大病を患い無能者となったことに始まる。年若い月里は阿勇の介護、家計維持のための重労働を強いられ、最後はある男性との不倫が露呈し、世間から非難が集中し自殺に追いやられる。

続いて「地に這うもの」陳久旺の例をみてみたい。陳久旺は老舗金源成商店の若旦那の設定である。かつては漢文書房から公学校四年まで教育をうけ、「当時の田舎ではりっぱな知識人」⁴¹と認められた青年であった。本人は師範学校を出て「判任官」になることを考えていたが、大旦那を担う父親の反対に遭い、雑貨店の跡取りとなることを余儀なくされる。だが、商店経営に携わったことが災いし、陳久旺は商売人型として墮落の一途をたどる。以下は関連個所の引用である。

台湾人が役人になりたがっても、めったにうまくいかない。所詮、人間は金さえあれば、何でもできる。（中略）生活の安定上、家業につくのが一番よい。⁴²

主人がしっかりさえしておれば、こんな店は黙っていても必ず儲かる商売

39 張文環「閩雛」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』、p. 245。

40 同注39、p. 249。

41 同注23、p. 28。

42 同注23、p. 31。



だ。山から来る産物の値段はこの店できめるのだから、損のしようがない。⁴³

かくして陳久旺は商店経営を通じた資本主義的な生き方に魅了され、若旦那となつてからは庶民相手に姑息な金儲けを続ける商売人型の典型に転ずる。やがて「梅風亭の若い芸者」⁴⁴に金を貢ぎ、かつ子守娘として雇った十五歳になる娘と姦通するようになり、世間に悪評が広まり、商店経営に悪影響をもたらす。物語ではそのような亭主を持ったヒロイン阿媛の苦悩の様子が示されている。本来ならば、後継者の不徳が祟り、商店経営が破綻、そしてヒロイン阿媛の女性悲劇が予想されるのである。物語では「しかし陳家はつぶれなかった。それは老番頭がしっかりしているうえに、若主人の背後に、若主人よりもいっそう頭のよい若奥さんがひかえているからだ」と噂された⁴⁵とあり、伝統的知識人の阿媛の気転で、危うく難を逃れた次第である。いずれにせよ、「陳家はつぶれなかった」の一言からも、作者は商売人型による商店経営衰退と女性悲劇の関係を配慮していたのは明らかである。

以上、本項における商売人型の子世代側は高等教育を受けながら、家長たる父親が商売人型であることが災いし人間性の劣った無能型、放蕩型に陥った設定である。「閨雛」阿勇は家長による不本意な高学歴取得を押し付けられ最後は無能者となり、「地に這うもの」陳久旺は家長により知識人の道を断たれながらも、栄利獲得が容易な商店経営の味を教えられ商売人型へと墮落する。即ち、その商店経営が老舗などの中流階級以上である場合、作者による主な批判対象は、子世代側に対して誤った教育観を施した親世代側に比重が置かれるのである。

4.3 まとめ

以上、商売人型の人物造形とその相手女性との関連性を論じてきた。以下、その要点を簡単にまとめた。

一、商売人型の子世代側の人物の設定は、主には作者による当時の台湾社会における封建主義と資本主義批判を目的とし、物語に描かれた女性悲劇設定もそれ

⁴³ 同注23、p. 30。

⁴⁴ 同注23、p. 36、p. 37。

⁴⁵ 同注23、p. 87。



ら社会制度の批判に準じるものである。

二、作品に描かれた旧女性ヒロインは勤労精神や道徳精神に富んだ一面が強調され、一律善良な模範庶民としての設定が常である。このような旧女性ヒロインの人物設定が意図するのは、商売人型の人間性における欠陥をより具体的にすべき効果をねらったものである。

5 結論

今回の研究は張文環小説における女性悲劇の更なる理解を目的する。その際、まず、筆者が着目したのは主にヒロインの恋愛、結婚対象となる相手男性の設定であり、本研究ではそれらを商店経営関係者と定義づけ分析を行った。これら人物像に関する研究成果は主に以下の通りである。

一、まず、張文環小説の女性悲劇には主にそれら女性の相手男性である商店経営関係の設定が不可欠であることが挙げられる。筆者が商店経営関係の男性人物を知識人型と商売人型の二種類に分類したのは理由がある。というのも、張文環小説の女性ヒロイン設定には新女性、旧女性の双方が含まれ、新女性ヒロインの相手が知識人型、そして旧女性の相手が商売人型という異なった人物設定が見られるからである。結論から言うと、新女性ヒロインと知識人型の男女設定の場合、女性悲劇に関する要素は比較的希薄であり、逆に旧女性と商売人型の男女設定にその要素を濃厚とすることが判明した。即ち、知識人型、商売人型の分析は、新女性、旧女性をめぐる女性悲劇の理解のための基本的研究だと言えるのである。

二、次に、旧女性をめぐる女性悲劇において、その根底にあるのが知識人型と商売人型との学問、教育をめぐる思想性の違いである。作者は親子二世家庭の設定を通じ、知識人型が人道主義を重視する生存型、商売人型が資本主義を重視する破滅型と分別しており、両者の価値観の基本的な違いを学問、教育にあることを提示した。その際、作者は商売人型への批判を提示し、それら商売人型の家庭が親世代と子世代の継承をめぐり衰退を免れない運命にあることを論じた。いっぽう、女性悲劇の中心人物となる旧女性の場合、いずれもこれら商売人型との結婚が運命づけられていることで、旧女性の悲劇は不可避であったことが分



かる。即ち、商売人型の破滅、そして旧女性の悲劇は一体の関係にあつたと言える。

三、張文環に登場する女性悲劇の要因が、主に女性の自由を奪う儒教伝統にあるという見方が一般である。張文環小説では儒教の道德規範や婦徳觀念の規範は往々に男尊社会維持の基盤となり、本項で取りあげたヒロインは常にその脅威を感じ、精神的圧迫を被っているのも確かである。「落蕾」秀英、「みさを」翡鳳、「闖雞」月里などは男尊社会における被抑圧者的な状況下、儒教道德の婦徳観を乱したことで生存基盤を失う。ただし、これらヒロインの凄惨な末路は、あくまで結婚相手たる男性人物の人間性や生活力の欠如によるものである。要するに、張文環小説における女性悲劇に関しては、その悲劇の要因が常にヒロインの結婚相手の男性に置かれていることに留意すべきである。また、張文環は基本的に儒教伝統を重視する立場にあり、これは今回筆者が示した商店経営家庭をめぐる知識人型と商売人型の対比関係からも伺える。前者は儒教伝統を重視し道德に忠実な生き方を貫くが、逆に後者は儒教伝統よりも近代的な資本主義を第一義と考え己の利害関係を重視する。本研究で明らかにした如く、ヒロインの不幸の所在は、結婚相手となる商売人型という外的要因にあり、ヒロインの個人的要素は殆ど関与しない。即ち、張文環小説における女性悲劇の要因は、あくまで男性側の墮落を招く封建制度や資本主義にあつたとみるべきである。



参考文献

テキスト

- 張文環 (1936) 「部落の元老」『臺灣文藝』第3卷第4、5合併号pp. 2-17
張文環 (1943) 「迷兒」『臺灣文學』第3卷第3号pp. 130-137
張文環 (1944) 「土の匂ひ」『臺灣文藝』第1卷第3号pp. 3-46
張文環 (1975) 『地に這うもの』、東京：現代文化社
中島利郎(編) (1999) 『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』、東京：綠蔭書房
中島利郎(編) (2002) 『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：綠蔭書房

研究著書、論文など

- 張文薰 (2006) 「由『現代』觀想『故郷』—張文環<山茶花>作為文本的可能」『台灣文學研究學報』第2期pp. 5-28、台南：國家台灣文學館籌備處
張文薰 (著) 中島利郎 (訳) (2007) 「立身出世を求める青年たち—『風俗小説』張文環新論—」『日本台湾学会報』第4号pp. 56-80、東京：日本台湾学会
中島利雄 (1999) 「張文環作品解説」『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』 pp. 335-345、東京：綠蔭書房
柳書琴・陳萬益・中島利郎 (編) (1999) 「張文環著作年譜」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷 [張文環] 』 pp. 347-359、東京：綠蔭書房
柳書琴 (著) 野間 信幸 (訳) 馬雪峰 (他訳) (2011) 「張文環親戚・旧友訪探録」『東洋大学中国哲学文学科紀要』19 pp. 150-122、東京：東洋大学

